

文庫の経緯と沼田先生のお人柄

沼田文庫は、谷口貴都元法学部長（法学博士、2011年9月逝去）の発案であり、本学の所在地「高岡」が生んだ大法学者沼田稲次郎先生の文庫を作りたい、とのことであった。前後して沼田先生の親戚の方から大量の文献が寄贈され、末端弟子の私も憑かれたように所蔵物すべてを差し出した、ことに始まる。

沼田先生のご業績、ご経歴は別途揭示のとおりである。先生は確固たる沼田労働法学を、第2次世界大戦後、日本が明るい自由な世界へ解放される中で、いち早く形成された。そして、労働法学会のみならず、終生、平和と反戦の論陣を張るととともに、厳しく激しい世界である労働運動、民主主義運動の分野においても大きな指導力を発揮された。その多忙な中での、多岐にわたる著作物の創出力には、驚嘆畏敬のほかない。

なお、沼田先生関連の膨大な資料は、先生の全著作を含むほぼ全て、首都大学東京（旧東京都立大学）にて収集、公開されている。

ここに、沼田先生のご人物の一端を記しておきたい。先生は、京都帝国大学大学院1年次の昭和14年、陸軍に召集された。入隊前日まで論文を執筆し、指導教授の石田文治郎博士に郵送して、入隊された。終戦直前まで中国北支の最前線で八路軍（毛沢東＝中共軍）と対峙し戦った。その最中の昭和18年、小隊長の沼田陸軍少尉は、戦いについて、“同じき人の血がことなれる情熱に燃えて殺戮は止まず峯にも溪にも”と詠んだ（人間まんだら：沼田稲次郎拾遺 145頁）。

敵を前にした危険極まりない最前線にあって部下の命を最重要とし、「向こうの兵士もこちらの我々も、出は同じ農民だ、撃つな」と諭した。沼田隊が守備の日は敵の銃撃がなかった、とも聞いている。戦後、「沼田上官のおかげで、自分たちが存命するイマがある」、と部下たちが沼田会を結成し、先生を慕う温かい交流が永く続いた。

沼田先生が大学関係を引退された時、「我々の世代も、とにかく一度だけでも直接先生に教えを受けておきたい」との気運で、後に学長をつとめた助手のS氏が、中央大博士課程にゼミを設けて、沼田先生を拝み倒した。そこに東京都内数大学の博士課程中退者や大学就職予備軍が押し寄せたが、その中に私も紛れ込んだ。

その沼田ゼミは月2回土曜日午後の正味約3時間。毎回一人、自分が独自に研究中のテーマをレポートする。誰もが、不眠不休の準備をして始めるが、15分ももった例なし。すぐ、「もうエー！」の一声となる。後は先生の一人語りが続き、時に全員即答の質問が入り慄然、ただし先生は各自の答えに耳を傾け批判はされない。法学博士の学位をもつ国立大助教授A氏が、レジュメ呈示数分で終わった場面も忘れられない。ゼミの後は毎回沼田先生持ちのビール会。青ざめた発表者も、若い力と一層の意欲が蘇る。厳しくも楽しい、気合の入ったゼミであった。

平成29年6月

高岡法科大学

学長 千々岩 力